

## [館員随想]

## 新米事務局長のひとりごと

当館事務局長 高田啓之介

月 辿りついたら 岬のはずれ  
赤い灯がつく ポツリと  
ひとつ…月

大和文華館という美術館の情報紙としては、あまり関係の無きような歌謡曲の歌詞で書き出してしまいました。ご存知、故石原裕次郎のヒット曲「北の旅人」の一節であります。

私が妻と2人で、春まだ浅き3月の北海道を旅したのは2年前のこと、網走で流氷と初対面し、旧網走監獄を見学し、霧の釧路を経て、まさしく辿りついた所が小樽でありました。

月夜の小樽は 雨になるだろう月  
まだ昼でしたが、帰路の飛行機まで時間があつたので、名物の寿司を食い、蟹の身がたっぷり浮かんだラーメンに舌鼓を打ち、満腹になった2人がまたまた辿りついた所が「石原裕次郎記念館」。

訪れられた方もあるかも知れませんが、ここでは石原裕次郎さんが生前出演された映画のハイライトシーンの紹介をはじめ、ヒット曲のレコード、愛用の自家用車、果ては生前着用の衣服類や靴までも整然と展示されておりました。

妻は、映画関係の展示よりも衣服類に興味を持ったらしく、時を忘れて熱心に見入っておりましたので、「そんなに関心があるのなら、俺が死んだら俺の記念館をたてたらどうや」と言ってやりましたところ、普段はおっとり屋で不必要な間をおいて返事をしてくる妻が、まるで別人のように間髪を入れず、「なに言ってるの、あなたのを展示しても誰も見に来ないわよ」との手厳しい返答。口には出さないが、「そりゃそうです」と私も間髪を入れずに納得し、やはりこんな所に展示されるのは功成名を遂げた人の遺品や

作品しか展示されないのかなあと思っただけであります。

しかしながら、縁あって昨年の8月から当館の業務に携わることとなり、当館の収蔵品を目のあたりにする機会を得たことから、これまでの私の美術館に対する考え方は、殆ど一面的なものであったなあと反省させられた次第であります。

はずかしながら、私は学生時代から現在に至るまで、およそ美術館や博物館とは縁もゆかりも無く勉強一筋!!と言え異論がある方もおられそうなので、勉強以外の教養の摂取にもひたむきな努力を傾けて参ったのであります。残念ながら、美術品を鑑賞して心を豊かにするという所までは趣味の範囲を拡げることはできませんでした。いわば、全くのズブの素人であり、たまたま「俵屋宗達展」や「ゴッホ展」がどこそこの美術館で開催されますよということを耳にする機会があつても、単純にああ、さすがにあの美術館は有名な芸術家の作品をたくさん集めているのだなあという程度の認識しかなかったのであります。

このたび、目から鱗が落ちる思いがしたのは、美術館というものは決してそれだけのものではない。名も無き人々が作製した作品もその価値が認められれば、立派に展示品の一つとしての地位を占めているのではないかということに再認識することができたことであります。

確かにネームバリューで考えると、その作品は有名作家には及ばない。しかし、その時代に生きた人々の風習や生活様式、さらに発展させて考えるならば、その時代の人々の考え方や思想までが現代の世の中にひしひしと伝わってくるものこそ、真に文化財的価値を持つものだと思えてなりません。

当館が所蔵する国宝「松浦屏風」も作者は不詳であります。しかしこれは、江戸時代の風俗を見事に描き出しているという点で価値が認められているかと思えます。

ここで、あえて生意気なことを申し上げますと、美術館の果す役割は、この様に真に価値あるものを収集し、研究し、それを展示することによってご覧になれる方々に「心の豊かさ」(これは、非常に抽象的な言葉で、未だによく理解できないのであります。自分なりの勝手な解釈をすると、その時代の人々の息吹に触れるとでも申しましょうか。例えば、歴史上の人物が歴史を作る大舞台で心静かに茶碗を手に取り、茶を喫している時、その時彼はこんなことを考えていたのではないだろうかと思像を逞しくすることではないでしょうか。)を持っていただくことにあると思えます。

しかし、悲しむべきことに、一時のバブル景気の後遺症と申しますか、美術品を投機の対象としか見ない風潮も少なからず残っていることは事実であります。

投機の対象として見る場合は、これは誰々の作品であるか、またこの焼物はどこで作られたもので焼き加減といい、色あいといい、なんともスバラシイといった点にしか価値を認めないものであると思えます。そんな中で、真に価値ある美術品が何点も、見向きもされずに海外に流出したり、地に埋もれて忘れ去られてしまったりしたこともあろうかと思えます。

それは、悲しむべきことを通りこし、大袈裟に申すならば、国家の損失であり、外国からも我国はその程度の国なのかとの侮を受けて

も仕方がないと思うのであります。

美術品は、人類全体の所有物であり決して一部の人が独占して良いものではないということは言わずもがなのことであります。

しかしながら、この至極当然の事柄を人類全体がどこまで意識しているか、となりますと若干の疑問をさしはさむ余地も無きにしてもあらずであります。

美術館も、またそこに従事する我々関係者も、この点を忘れてしまつては、その存在価値は無くなるものと思うのであります。

着任早々、はなはだ取りとめもないことを縷縷、申し上げて参りましたが、この小文を作成する上で、私の美術に対する考え方や、今後の当館の運営上の留意点などが整理できたことに感謝している次第であります。さらに手前勝手なことを言わせてもらえば、妻との小旅行が、ただでさえ文章の苦手な私に良いヒントを与えてくれました。あらためて内助の功にも感謝して、そろそろペンを置こうと思うのですが、もう少しお付き合い下さい。

「石原裕次郎記念館」であんな偉そうなことを申した妻であります。最近彼女は、近鉄アート館で開催された「マリリンモンロー展」を見に行つたそうです。

まだ感想は聞いておりませんが、ひょっとして「私もマリリンモンローにあやかって『高田満里(妻の名前です)展』を開いてみようかな」というような、大それたことを口にすることがあつたなら、「アホか、お前、そんなショウムナイもの誰が見に行くか」と、ボロクソに言つてやろうかと秘かに思っている私であります。



石原裕次郎記念館と筆者

季刊 美のたより No.122

平成10年2月19日

発行 大和文華館